



スピーチする稲村次郎 JICA ガーナ事務所長



完成したソーラーパネル



野口研玄関に設置された運転状況を示す画面

日本政府の無償資金協力による「太陽光を活用したクリーンエネルギー導入計画」の一環として、昨年 7 月より設置工事を行っていたソーラーシステムが完成し、4 月 17 日野口研への譲渡式が行われました(上写真)。野口研の電力は、これでは賄えるそうです。

少し時間をおきましたが、昨年12月から今年2月にかけてガーナで研修をしていた本学学生達のガーナ滞在記を今号より数回に分けてご紹介したいと思います。短期間の滞在ではありましたが、若い感性は大きなものを持ち帰っているようです。まずは2月28日に行われた共同研究の合同プロジェクト会議の様子と、最近の出来事から「田中JICA理事長の野口研訪問」をお送りいたします。

## 最近の研究活動報告 - 合同プロジェクト会議

去る 2 月 28 日、感染症研究国際ネットワーク推進プログラム(J-GRID)の野口記念医学研究所-東京医科歯科大学間における共同研究の合同プロジェクト会議が研究所内の小会議室にて行われました(写真 1)。この合同プロジェクト会議は、毎年 1 回、両機関で交わされた MOU に基づいて行われている共同研究の進捗状況を報告・討議することを目的として開かれています。今回の出席者は、日本側が研究代表者である太田伸生教授を筆頭に、ウイルス学分野の派遣教員井戸栄治特任教授と寄生虫学分野の派遣教員鈴木高史特任教授の 3 人。ガーナ側は、Kwadwo Koram 所長以下、ウイルス学部の William Ampofo 部長、同 James



写真 1 合同プロジェクト会議の様子。

Brandful 上級研究員、Jacob Barnor 研究員、および寄生虫病学部の Iren Ayi 部長、Dziedzom DeSouza 研究員、免疫学部の Michael Ofori 上級研究員の 7 人で、その他にオブザーバーとしてプロジェクトで雇われた研究補助

員ら数名が参加しました。

会議では、J-GRID の中でガーナ拠点全般に亘る Overview から始まり、次いで毎年度調印される MOU に添付された研究計画案に沿って行われた個々の研究の進捗状況が報告・討議され、合わせて導入された機器や予算情報なども報告されました。また計画中の研究プランなどもここで開示され、率直な意見交換がなされると同時に、貴重な助言なども頂きました。もちろん普段から現地側カウンターパートらと密に情報交換することが拠点研究活動を円滑に進める上で何よりも必須かつ有効なわけですが、こうした関係者全員が集まった改まった場で、このような合同会議を持つことは、とりわけ発展途上国との国際共同研究では極めて重要な意味を持ちます。ガーナ拠点も開設から実質 4 年余りが経過しており、こうした席上で、より多くの成果を自信をもって報告できるよう更に一段と努力して行きたいと思っています。(井戸)

## 最近の出来事から 一田国際協力機構理事長の野口研訪問



写真 1 野口研 Koram 所長(左から 2 人目)と国際協力機構 田中明彦理事長(右から 2 人目)。左端は野口研 Boateng 事務局長、右端は稲村 JICA ガーナ事務所長です。

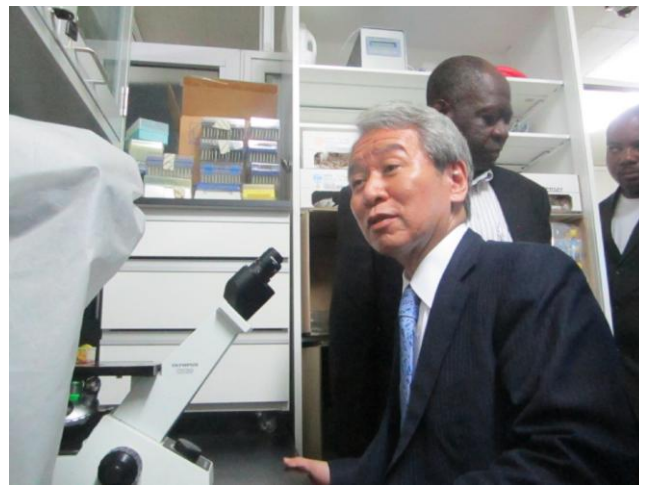


写真 2 寄生虫病学研究室を視察中の田中理事長。

国際協力機構(JICA)田中明彦理事長が本年 2 月から 3 月にかけてアフリカ諸国を歴訪中、ここガーナにはサブ・サハラ 7 ヶ国目の国として訪問され、3 月 14 日に我々の野口記念医学研究所を視察されました。マハマ大統領との面会などスケジュールが密であった関係上、極めて短い訪問時間しかありませんでしたが、その間に Koram 所長との挨拶(写真 1)、現在 JICA/JST による地球規模課題対応国際科学技術協力(SATREPS)の共同研究が行われている寄生虫病学の研究室見学(写真 2)、そして J-GRID の派遣教員の紹介などが行われました。

先月号のニューズレターでご紹介しましたように、野口研の中庭には研究所設立に尽力された故本多憲児先生の功績を讃える石碑があり、すぐその横にご遺灰の一部が安置されたばかりでした。田中理事長はこの石碑の前で故人のために献花して下さいました(写真 3)。また丁度この時、本多先生が現役として野口研究所のプロジェクトに携わっていらした当時の記憶もある不肖私が、簡単に研究所の由来などをご説明申し上げました(写真 4)。当研究所は日本-ガーナ間の永年に亘る医療協力の記念塔であるばかりでなく、対アフリカ科学技術協力外交の象徴的存在でもあります。これからも我が国とガーナのみならず、世界に誇れる良い仕事を頑張って続けられてくださいとの暖かい激励を頂きました。実は、JICA 半世紀の歴史の中で、組織のトップの方(以前は国際協力事業団総裁と呼ばれていましたが、現在は理事長がそれに相当する職名となります)がガーナと野口研を訪問されたのは初めてとなります。本年は第 5 回アフリカ開発会議(TICAD V)が横浜で開催される年でもあり、田中理事長のアフリカ歴訪も当然その関連でスケジュールが組まれたものと思います。その意味でも極めて重要な節目に居合わせたことになり、アフリカにおける我が国の科学技術協力の存在が、よりクローズアップされる絶好の機会



でもありますので、益々研究に励まねばと心を引き締めた次第です。(井戸)



写真 3 故本多憲児先生の石碑の前で田中理事長が献花されました。



写真 4 中庭で研究所設立の由来などを説明する井戸 J-GRID ガーナ拠点長。

## ガーナ滞在記 一池乗愛依（寄生虫病学部）

You risk tears if you let yourself be tamed...

(いつのまにか飼いならされると、人はちょっぴり泣き出したいような気持ちになるのです…)

サンテグジュペリ『星の王子さま』



ガーナに派遣されたプロセメ学生 5 名

帰国してから、ふとガーナが恋しくなると、この **be tamed** という言葉が思い出されます。この3か月、気付けばガーナ人、日本人に関わらず、本当に色々な人、そしてガーナに **tame** されたなと思います。ガーナを離れてこんなに寂しくなるなんて、行く前は想像もしていなかったです。それだけ、素敵な出会いがたくさんあり、今後宝物になるような貴重な経験をさせていただいたのだと、今改めて実感しています。

今回私たち3人は、医学科4年生後期のプロジェクトセメスターの期間に、国際環境寄生虫病学教室から、ガーナ派遣学生として野口記念医学研究所に留学する機会をいただきました。経済発展しつ

つあるとは言え、インフラ整備が必ずしも進んでいるとは言えないガーナで3か月研究・生活をしていくことができるのか、正直心配な時もありましたが、先生方や志村さん、野口研のスタッフの皆さん、在留邦人の方々に支えていただいて、乗り切ることができました。本当に感謝しています。

滞在中、私はラボワーク中心で平日はずっと実験室にいたのですが（抗トリパノソーマ活性のある生薬抽出物を探す研究をしていました）、日本人の指導教官の先生とガーナ人のリサーチアシスタントの方たちから、言葉や文化が違って、人を思いやること、尊重しあうことができること、そして共に何かに取り組むことが、本当に楽しくやりがいがあることであるということをお教えました。

また、研究の合間に、さまざまな立場でガーナにいらしている在留邦人の方々のお話を伺ったり、ガーナの小学

校や日本人補習校の子供たちと交流する中で、今まで自分が当たり前だと思っていた考え方・感じ方が覆されることもありました。色々と見聞きする中で、ただ物資を与えるだけの援助ではなく、異国の地に出向いて、そこで自分の持っている技術を活かしながらその土地の人と一緒にそこで今起きている問題を解決していくような形の「国際協力」の大切さにも気付かされました。しかし、たくさん学んだことがあったなと思う一方で、3か月はガーナを知るには短かったなとも思います。また、色々なところに出掛けてガーナ中を見て回る時間がなかったということ以上に、今の自分には知らないことが多すぎて、気付くことができなかったこと、考えることができなかったことも多かったなと痛感しています。いただいたチャンスを、全て活かして学ぶことができていたか、まだわからないなと思うこともあります。ただ、今回の留学で、ガーナにいるガーナ人・日本人の方々と過ごした日々は、私の中の何かを確実に変えつつあるなとも感じています。少なくともガーナにtameされた以上、もうガーナにいる人々はstrangersではないし、そこで起こっている問題も、他人事には感じられなくなったなと思います。



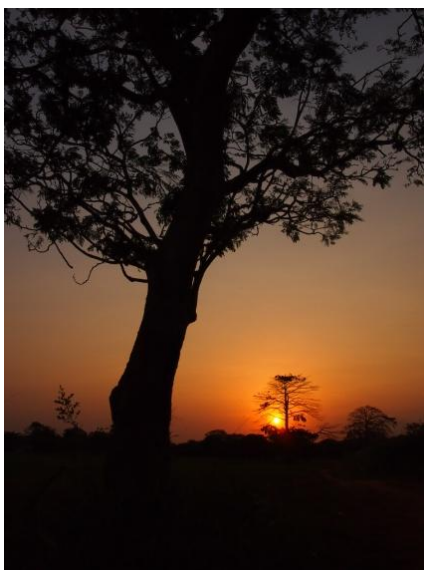
一緒に料理をした寮の友達と



田村日本人会会長と

You become responsible for forever for what you've tamed.

(きみは、きみが飼いなしたものに対して、永久に責任があるんだ。)



寮の裏の夕日！きれいでした。

ガーナ滞在中に今の自分が学ぶことができたことを大切にしつつ、自分が学ぶことができなかったこと、知ることができなかったことに、これから目を向け続けていくことができてはじめて、今回いただいた留学を活かすことができたと言えるのかもしれません。今年の夏は、私の住む街横浜で、TICADV（第5回アフリカ開発会議）というアフリカについて考える会議が開かれ、それに向けてアフリカ関連のイベントが多く開かれるので、積極的に参加していきたいです。今後も学び続け、いつかまた、今度は何か恩返しできるような技術を身に着けて、ガーナ、アフリカに帰ることができたら良いなと思います。

最後に改めて、今回留学するにあたり支えてくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



ガーナでの滞在期間中、大学の学生寮に宿泊していました。2人1部屋、キッチン・トイレ・シャワーはすべて共同、洗濯は手洗いという点以外は、改修前の医科歯科大学の寮でもみられた光景でした。それに加え無線LANがとんでいて有料で利用できるような設備も整っていて、入寮当初はアフリカ・発展途上国と聞いたときに浮かべる生活とあまりに異なり、不自由さはないように思えました。が、いざ生活を始めてみると、突然の停電、1日たっても復旧しない断水などの洗礼を受け、最初は困惑し苦労しました。ガーナでの生活は日本と全て異なり様々な面で不自由なことがあったにも関わらず、帰国前にはそういった環境を平然と享受させ、また訪れたいと思わせる魅力を持つ不思議な国でした。

平日は基本的に野口研のウイルス学部の研究室で、大学のプロジェクトであるHIV研究のリサーチアシスタントをしている2人のガーナ人の方にお世話になりました(写真)。台数は多くないものの、日本の研究室で見た実験機器と同じものを使って実験しており、ここもアフリカというイメージとは程遠いものでした。治安の問題もあるせいか日本のように夜遅くまで実験をすることはありませんが、中には毎日7時前に研究室に来て実験を始めている人もいます。電力供給が安定しないことが原因で実験機器が故障してしまったり、実験機器はあるものの試薬がないので結局使えないというディスプレイがあるのは確かですが、研究に対するモチベーションの高さは先進国に負けていません。ドクターには会うたびに、まるで挨拶のように「何を学んだのか・どんな実験をしたのか」という質問をよく自分たちに投げかけられ、積極的にコミュニケーションをとろう、あるいは議論しようとしていました。こういった姿勢は我々が先進国で研究する上でも見習うべきものであったと思います。



伊藤君(右)と、リサーチアシスタントの Ishmael 君と Esinam さん



野口研ゲート付近に立つ研究所名を刻んだ石碑

また、この研修期間中にはいくつかの病院を見る機会を提供していただきました。その中の1つにCape Coast Metropolitan Hospitalという病院がありました。ケープコーストは首都アクラから車で3時間ほどの距離にある都市で、かつて奴隷貿易の拠点として使われていた城が残っていることで観光地としても有名な場所です。この病院はその地域では2、3番目に主要な病院の1つと聞いていたのですが、先進国の医療現場と比較するととてもいい環境だとはいえない場所でした。病室は基本共同、仕切りのカーテンや空調はありません。日本の病院であれば、希望すれば個人の病室が可能ですし、共同であったとしても有る程度プライバシーなどが配慮されており、空調も完備しています。看護師は近くに待機しているものの医師の数は慢性的に不

足していて、病態が急変した時への対応が迅速に行われるのか、また病棟は男性・女性・妊婦および子供の病棟というとても大雑把な分けられ方をしているだけで、感染症の蔓延対策は行われているのかなど様々な所に不安を感じました。こういった状況にありながらも、この病院には多くの患者さんが待機所に座っていました。自分たちの視点からすると、これでは正確な診断・治療を行っていくのは相当難しいのではと疑問を感じてしまうのは、日本がどの病院でもある程度の機器がそろい検査ができるというのが当たり前というのが前提にあることが

原因で、それは決していい治療ができないという意味ではないのだと感じました。不足する状況の中で彼らがどのような診断・治療を行っているのか、その根本となっているガーナの医学教育はどのように行われているのかということに非常に興味をひかれました。

何か特別な思いを持ってガーナを訪れたわけではありませんでした。しかし、今ではガーナの日常生活から食、文化、医療といった様々なことに自然と関心を持ってしまいます。このような経験を支えてくれた多くの日本人・ガーナ人の方々に感謝したいと思います。

## ガーナ滞在記 ー加藤爽子（寄生虫病学部）

ガーナから帰国して早1ヶ月以上が経ち学年も上がりました。この1ヶ月はガーナにいた頃に比べてなんて薄っぺらい日常だったんだろう…としみじみしてしまいます。帰国当初はガーナのことばかり周りに話していましたが、哀しい哉、今では大方日本人に戻り、身体に残る日焼けと蚊に刺されの痕が、楽しかった日々を思い出させるのみです。

去る3月末、5年に1回東京で開催される TICAD(アフリカ開発会議)初の学生プロジェクトの活動報告会に足を運びました。アフリカと日本のユース計100名が10日間の合宿研修を通してお互いを知り、自分達の未来を良いものにするための政策提言を作成するプロジェクトです。学生発表や識者によるパネルディスカッションを聞いていて、若者ならではの前向きな視点や未来を「自分事」として捉えている姿勢に感銘を受けました。アフリカの若者が持つエネルギーの大きさは彼らと接したことがなければ分からないと思います。



TICAD V 学生プロジェクト報告会の様子

アフリカを援助という文脈で語る時代は終わりました。アフリカと言っても様々な国や文化があるし、彼らの成長力は凄まじく、経済成長の停止した日本は、彼らと共に生きていく道を探る必要があることでしょう。でもやはり若い内に異なる文化の同世代の人々と関わる経験はかけがえのないものになると学生の皆さんを見て感じました。学生は未熟なんかじゃない、そして微力と無力の間には大きな違いがある、学生が未来に対してできることを今から真摯にしていってほしい、というパネラーの方からのメッセージが印象的でした。

最近しばしば思いを巡らせるのは、ガーナに行く前後で私は何か変わったのだろうか、ということです。

1つ言えるとしたら…。世界の見方が変わったかもしれない。

大袈裟な言い様と思われるかもしれませんが、これまでなかった「アフリカ」というピースがやっと見つかったとでも言うのでしょうか。漠然と抱いていたアフリカ大陸への憧れが少し現実味を帯び、アフリカなしの世界を想像できなくなりました。

ガーナで見聞きしたこと、知ったこと、学んだことはあまりに多すぎて、ひとまず頬袋の中にためこむのが精いっぱいでしたが、なるべく多くのものを吸収したいです。

知らなかった世界に足を踏み入れるというのは総じてきっと同じことで、踏み入れる時の一步は物理的には小さ

くても、踏み入れた先から見る世界は大きく異なっているのだと信じています。大したことはできない私ですが、このガーナでの生活で得たものがこれから先の人生できっと生きてきて、今思っている以上に違う世界を見せてくれるのを楽しみにしています。

とりあえず今は、すっかり慣れてしまったガーナの大きなから一旦抜け出して、精一杯臨床実習に向けて頑張ります。またガーナの地を踏む日を楽しみにしながら…！

## 野口研来訪者リスト(敬称略) ～2013年3月

|      |          |          |
|------|----------|----------|
| 森永 紀 | 長崎国際大学   | 10/22-26 |
| 山岡昇司 | 東京医科歯科大学 | 2/17-22  |
| 吉田 丘 | 東京医科歯科大学 | 2/17-22  |
| 堀 泰徳 | 東京医科歯科大学 | 2/17-22  |
| 阿部俊子 | 外務大臣政務官  | 2/19     |
| 太田伸生 | 東京医科歯科大学 | 2/26-3/1 |
| 皆川 昇 | 長崎大学     | 3/6-3/10 |
| 川田 均 | 長崎大学     | 3/6-3/10 |
| 本多道子 | 故本多憲児夫人  | 3/7      |
| 伊奈俊子 | 故本多憲児令嬢  | 3/7      |
| 田中明彦 | JICA 理事長 | 3/14     |
| 山本大介 | 自治医科大学   | 3/18-22  |
| 小沢 剛 | 東京芸術大学   | 3/26     |

### 編集後記

この時期、きれいだなあと思うのは「火炎樹」です。研修生の佐々木君の「植物記」でも紹介されていました。野口研の中庭に赤々と燃え上がるように目にも鮮やかな花をつけた大木を見ると、力がみなぎってくるような気分になるので不思議です。

制作：志村 文責：井戸、鈴木

ご意見ご要望などの送り先：shimura.kyoten@gmail.com

